

保育者養成における表現(造形)の授業の一展開(2)

——雑草との出会いを通して——

石森 由理

A Case Study of the Art Classes in Nursery School Teacher Training

Yuri ISHIMORI

「雑草」は幼児期の子どもたちにとって非常に身近なものである。保育者を目指す学生が、子どもの目線に立って雑草に再び出会い、「描く」ことを通してどのような気づきがあるだろうか。学生の気づきをアンケートからみていく。

1. はじめに

幼稚園教育要領¹の「表現」において、内容の取扱いに次のように記されている。

(1)豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。

しかしながら、近年、自然とのかかわりが薄れている。身近な環境に目を向ける意識も低くなっているように感じる。それは保育者を目指す学生にとっても同様である。子どもの豊かな感性を育む保育者になるためにも、学生自身が身近な環境に目を向けること、子どもたちと感動を共有する為の素地をつくる必要があるのではないだろうか。

幼児は身近な自然にからだ全体の諸感覚を通してかかわることで、多くのことを学んでいる。自然と出会うことによって、自然のおもしろさやきれいさに出会ったり、心を揺さぶられるような感動や驚きの体験の積み重ねによってイメージが蓄積されていく。そして、その感動や体験を共感し見守る保育者の存在が非常に重要になってくる。

そこで「図画工作」において、自然素材を使った表現活動を授業に積極的に取り入れることにした。本論ではその中の「雑草に出会う(1)及び(2)」を取り上げる。

2. 研究目的

多くの人は成長していくにつれて、「雑草」について気にかけることさえなくなってしまう。しかしながら、「雑草」は幼児期の子どもたちにとって非常に身近なものである。保育者を目指す学生が、子どもの目線に立って雑草に再び出会うことでどのような気づきがあるだろう

か。

そこで授業では、「雑草との出会い」を重視し「雑草」を採集することからはじめた。「雑草」を採集するときに視覚だけでなく触覚や嗅覚も使うであろう。諸感覚を使った出会いがどのような気づきをもたらすのか。また、「よく観察する・よく見る」そして「描く」という行為を通してどのような気づきがあったのか。

本論では、以上の2点を授業後に出されたアンケートからみていく。詳しい分析は日本保育学会（2006年5月）で発表する予定である。

3. 研究方法

本学における「図画工作」の授業は通期科目であり1年次に開講される。本論ではその授業の中の「五感を使った自然とのふれあい」にある「雑草に出会う(1)」「雑草に出会う(2)」の授業後に出されたアンケートをもとに考察する。

調査日時：2005年7月（授業は6月第4週と7月第1週に行った）

調査対象：千葉敬愛短期大学初等教育学科1回生（144名）

調査方法：記述式アンケート

授業概要

「雑草に出会う(1)」

1. 学生はあらかじめ雑草1種類を自分で探し、根から採集して持ってくる。
2. 『ぞっそう』²の読み聞かせをする。
3. 授業当日、その雑草を虫めがねで観察しながら水彩絵の具で描く。(約50分)
注意点として(1)雑草をわきに置いて描く(2)根から描くことをあげた。
4. 最後に図鑑³を示し、イヌムギ[イネ科]を翌週は採集してくるよう指示する。

「雑草に出会う(2)」

1. 学生はあらかじめイヌムギを採集して持ってくる。
2. 授業当日、そのイヌムギを虫めがねで観察しながら水彩絵の具で描く。(約50分)
3. 授業後、アンケートをとる。(設問は2つ)

4. 結果及び考察

4-1「2種類の雑草を採集してどのようなところに気づきましたか」という質問を行った。学生の記述の中で多かったものは以下の3つである。

- (1) 雑草の形状への気づきと美しさへの気づきについての記述
- (2) 雑草の生命力や根の力強さに関する記述
- (3) 雑草の採集を通して、雑草そのものに対する意識の変化についての記述

学生の記述を以下に示す。

（1）雑草の形状への気づきと美しさへの気づきについての記述

「土と水などのだいたい同じような条件を与えられて育つのにこんなに違いがあってすごいなと思ったし、不思議だなあと思いました。」

「場所や土の感じで生える草も違うんだなあと思った。根の形も違ったし、葉脈の形も違ったし、いろいろな種類の植物があるのだなあと改めて感じた。」

「1種類目の雑草はきれいな色の花がかわいらしくついていたので採集しました。周囲にはシロツメクサやオオバコなど背の低い雑草が生えていました。2種類目（イヌムギ）は川の土手に背の高い他の雑草と一緒に茂っていました。なので、見つけるのが私はちょっと大変でした。その雑草が成長していくうえで必要な環境で生息していることが改めてわかりました。（背の高い低い、水のはけ方など）」

「物井にはイヌムギはあまり生えていませんでした。私の家は周りが畑や林なので、イヌムギがたくさん生えていました。環境によって生え方が違うんだなあと思いました。一つ気づいたことは小さな雑草は芝生の中から生えたり固い土から生えているのが多く、長いイヌムギのような雑草は土手などのやわらかい土から生えていたような気がしました。」

「朝、雑草をとりに行くと、梅雨のため雨がよく降っていて雑草にくっつきキラキラ光っていてとてもキレイだった。1つの雑草が生えている場所には雑草だけでなく、必ず他の場所にも生えていた。そのため1つの雑草を取りにいくだけでたくさんの植物を見ることができた。」

「草にも様々な種類があり、生えている場所も匂いも違うんだと知ることができて、再確認できて、よかったです。」

「“雑草を取る”という日常の生活ではなかなかやる機会のないことを行くと、いつも見るように見えていない所にも目を向けることができる。雑草を取るまでは“雑草を描く”ということしか頭にはなかったけど、雑草の生えている所を探すことから多くの発見があった。」

（2）雑草の生命力や根の力強さに関する記述

「雑草にも様々な種類があるんだなと改めて実感しました。根から抜くとき、なかなか抜けず根からうまく抜けませんでした。雑草の生命力が伝わってくるような気がしました」

「なかなか根っこからぬくことが大変だった。途中できれてしまった。それほど根の力が強いんだと実感した。何本もの草にそれぞれ命があり、精一杯生きていることを草から再び教わった。」

「根は掘りおこさないと見えないので珍しかった。根はすごいしっかりしていて雑草は強いんだなあと思った。」

「イヌムギを抜くときになかなか根から抜けなくて、力強く生きているんだなと感じまし

た。」

「1つ目に採集した雑草はまだ根に種がついていて、感動しました。生命のすごさ。子どもにも伝えたいと思います。」

「最初に抜いた雑草は根っこから抜きやすかったけれど、イヌムギは根っこから抜けず茎の途中から切らないといけなかった。同じ雑草なのに根や茎のかたさが全然違った。」

(3) 雑草の採集を通して、雑草そのものに対する意識の変化が生じたことについての記述

「“雑草”と一つにまとめて言えば簡単だけど、色や形、特に採集する時は根のはり方が違うため、“雑草”といっても全く別のものに感じた。」

「“雑草”と言ってしまうと1つの種類だが、たくさんの雑草という名の草があった。根がバサッとなっている草や、1つの大黒柱のような根からチョロチョロっと出てる草もあった。葉の形の全然違うし、育ち方も違う。雑草は1つの種類として言うもんじゃないなと思った。」

「雑草を取りに行った時にどれを取っていいのか迷うほどいろんな色、いろんな形、いろんな大きさの雑草があることに改めて気付きました。」

「いつも道を歩くときに、ほとんどと言って良い程雑草には目を向けることがありませんでした。名前も知らないし、また知らないことに対して何とも思っていませんでした。だけど今回、どの雑草を持って行こうかなと思って見てみると背の高さや葉の色や形など様々で、ある1ヵ所だけを見てもこんなにたくさんあるのだから雑草の種類は一体いくつあるんだろうと思いました。」

4-2 「“よく観察して描く”ということを通してどのようなことを感じましたか」という質問に対し、主だった記述は以下の4項目になる。

- (1) よく観察する・よく見ることについての記述
- (2) 雑草の手触りや形状、においなどについての記述
- (3) 「描く」という行為を通しての気づきに関する記述
- (4) 「雑草」そのものに対する意識の変化についての記述

学生の記述を以下に示す。

(1) よく観察する・よく見ることについての記述

「よく観察することによって、今まで見分けのつかなかった同じような草にも、それぞれの特徴があり、名前もあるということをあらためて気づかされました。」

「よく観察するだけでそのものがまた別のものに感じたりする。不思議。また、ただ目でそのまま見るのと虫めがねを通して見るのも違った感じがする。ただ観察するといってもたくさんの感じ方があり、楽しみがあると思った。」

「よく観察するというのは、いろんな発見があって1つの物に対する見方や印象がとても変

わるものなのだなあと思いました」

「葉の表と裏では色が違うし、根っこも草によって違いました。“よく見る”ということで単純ではない草の形に気がつきました。」

「虫めがねでよく観察すると、根の先にうぶ毛のような細かい毛がびっしりと生えていてビックリしました。こんなに身近にあるものでも知らない事があって、じっくり観察するのは大事だと感じました。」

「雑草の中でも部分部分でかわいそうなくらい汚れている部分もあったり、とてもきれいな緑色の部分もあったりしていて、“ここは虫に食べられたのかな？”とか“この葉っぱはたくさん栄養をもらっているんだなあ”などと小さい発見ができたことがとても楽しかった。」

「虫めがねで葉のまわりや根っこのところを見ると微妙にピンクがかっていたり紫がかっていたりして、よく観察したならではの発見ができました。難しかったけれど、私的にいろいろな発見ができて良かったと思いました。」

（2）雑草の手触りや形状、においなどについての記述

「同じ“雑草”と呼ばれているけど、虫メガネでよく観察するとやっぱり根の生え方・葉の形・葉脈・色も全然違って、触った感じも全く違いました。」

「先週の草は水々しい感じで鮮やかな緑だったが、今週の草は少しかたい感じで水分がない感じがしました。葉脈も今週の葉っぱの方が浮き出ている感じでした。手が切れるような鋭い感じでした。」

「雑草もその種類の数だけ違った色、違った形、違った手触りや違った匂いがあるんだなあとあらためて実感しました。」

「茎の中心が空洞なことに気づいた。葉っぱがべたべたすることに気づいた。」

「2種類とも同じ緑系の色なのに、全く違った色・質感だった。根っこはとても複雑で長かったり、短かったり……。茎の部分には毛が生えていたり、小さな虫がついていたりした。いろんな色が混ざり合って1つの植物の色になっていた。」

「どっちも緑の植物だけど、色も違うし、葉の形も全然違うし、茎の質感とかも違った。植物によってこんなにも違うところがあるんだあと思った。」

（3）「描く」という行為を通しての気づきに関する記述

「“よく観察し描く”というのは雑草の色が変わっているところ、根の伸び方など細部まで見て感じて受け止めることだと思う。今回、自分はそれが出来た。上手には描けなかったが、自分で納得して“よく観察し描く”ことが出来たと思う。」

「雑草を根から描くことで自然に草はどうやって生きているのか？などよく観察して描くことでたくさんのことを学べると思う。」

「観察して描くことでそんなにイヌムギは部分によって色が変わっているものだと思ってい

ませんでした。部分によって色の変化がとても多くありました。緑色、茶色、金色っぽい色、紫色の部分とたくさんの色が観察することによってわかりました。」

「色を同じ色にしようとしてつくっていたけれど、なかなか同じ色にならなくて大変でした。何色をたしても実際の色にはならず・・・自然の色はどうしたらできるのか不思議でした。」

「描いていると1本の雑草でも1色ではなく、微妙に違うたくさんの緑や、緑だけではなく他の色も混ざっていることがわかりました。そこで私は絵の具の緑を使わずに（前回の授業で50色作ったのをいかして）主に赤・青・黄を混ぜることによって、様々な緑を作って描きました。今までは“草だったら緑”と決めつけていましたが勉強になりました。」

「“草”といえば緑！っていうイメージがあったけれど、虫メガネでよく観察してみると、黄色や白、黄緑などいろんな色がありました。根も茶色！っていうイメージでしたが、黄色、赤、白っぽい色などほんとうにたくさんの色がありました。イメージや先入観だけで描くのではなく、きちんとよく観察して描くということがとても重要なんだなと思いました。」

「色の使い方にすごくこだわりました。緑色だけでも、赤が強かったり青や黄や白だったり使い方によって様々な緑を作り出し、より雑草にあった色を使うことで本物に近く描くことに力を入れることができました。」

（４）「雑草」そのものに対する意識の変化についての記述

「私達は普段、雑草といって、まとめて呼んでしまっているけど、色も違えば形も様々。そして、そのひとつひとつにきちんと名前が付いていること。雑草もただ生えているだけではなく、意味を持って生えていることに気づきました。」

「イヌムギの採集の時も学校の帰り、家から駅までの距離も普段はなにげなく通り過ぎてしまふけど、雑草のある所はよく観察しながら通学しました。そうすると色々な発見がありました。この雑草は学校の近くにも生えていたなあとあったり、ある雑草はどんな所にも生えていてコンクリートとコンクリートの間にも元気に生えていてすごい生命力だなあと感じました。」

「今回、2種類の雑草を手にしてみて、はじめは草なんてどれもいっしょだと思っていたけれど、雑草にも1つひとつ名前もあるし、1つひとつ色や大きさ、葉の形も違うことがよくわかりました。その辺に生えているただの雑草でも一つひとつがそれぞれ成長しているんだなと思いました。」

「緑一色だと勝手に決めつけていたけど、実際1本の草でも色がたくさんあって、よく見るととてもキレイでした。雑草なのに。」

以上の記述より、学生は2種類の「雑草」を採集するということを通して、それぞれの雑草の生えている環境がどのようなものか、雑草の生命力や根の力強さ、「雑草」そのものに対

する自分自身の意識の変化について気づいたことがわかった。学生は諸感覚を使って雑草と出会うことによって、雑草の生えている環境に目を向け、根も含めて引き抜くことによってその生命力を体験していた。また普段気にもとめなかった雑草にあらたに目を向けることになった。

またよく見つめることを通して「見ること」の大切さを実感し、雑草の色や形、手触り、またにおいを感じていた。そのことが「描く」という行為に大きく影響を与えていた。

5. まとめ

「雑草に出会う（1）」で最初に気に入った雑草を採集してきたとき、自分が手にしている雑草の名前を知っていた学生は皆無だった。名前を知らない中で、採集しながら、よく見ながら、描きながら、その雑草の魅力を味わい次第に惹かれていった様子がうかがえた。それは雑草そのものの美しさ、生命力によるものだろう。「雑草に出会う（2）」では名前のある雑草を採集してくるという課題のために、目的を持ってよく見つめるという中であらたな雑草との出会いがあったようだ。また採集することによって体全体の諸感覚を使って雑草を感じることができたと考えている。

「描く」という行為は、対象に真摯に向き合う行為である。「描く」という行為を通して自分の目で本質を見極めていく。今回、身近にあって描く対象にすることもなかった「雑草」と向き合うことによって、私たちの世界を構成しているものの本質に少しでも触れたような感覚があったのではないだろうか。今後も身近な自然素材を使った教材を模索していきたい。

-
- 1 『幼稚園教育要領解説』（1999）文部科学省 フレーベル館 p.202
 - 2 『ざっそう かがくのとも傑作集』（1976）甲斐信枝 福音館書店
 - 3 『新版日本原色雑草図鑑』（1975）沼田真編 全国農村教育協会 p.219